

今週のメニュー

[トピックス](#)

J P E C 研修会を東京、大阪で開催

- 塩ビの最新情報、新しいエネルギーのシェールガスや、安全な自動車などが紹介されました -

塩化ビニル環境対策協議会事務局

[随想](#)

「農ビリサイクルと私」 - 第一章：農ビリサイクルとの出会い -

株式会社黒田工業 黒田 實

[編集後記](#)

トピックス

J P E C 研修会を東京、大阪で開催

- 塩ビの最新情報、新しいエネルギーのシェールガスや、安全な自動車などが紹介されました -

塩化ビニル環境対策協議会事務局

塩化ビニル環境対策協議会(J P E C)は会員団体の会員の方々や塩ビの製品に関係されている皆様に、塩ビを取巻く最近の状況を紹介し外部の講師を招き講演会や研修会を開催しています。H 2 4 年度の事業として、研修・講演会を、2月18日東京八重洲富士屋ホテル、2月25日大阪の阪急グランドビルでそれぞれ開催し、東京・大阪とも50名を超える会員団体・企業の方々が参加しました。

東京・大阪ともまず、「塩ビをめぐる最近の状況」について内外の市況、行政や企業の動向の他、塩ビものづくりコンテストや東京大学で行ったシンポジウムなどについて紹介しました。

塩ビの環境性能に再着目し積極的に使用する動きが内外で出てきていること、また、デザイナー性能がデザイナーを惹き付けていることなど、ものづくりコンテストやエコプロダクツ展などの経験を交えて紹介しました。

東京では、独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構(JOGMEC)上席研究員の伊原賢博士に「シェール革命とは何か」と題して講演をいただきました。注目の新エネルギーのシェールガスの今後の動向、エネルギーや生活への影響などについてお話をいただきました。伊原博士はシェールガスの技術的・経済的なポテンシャル、産地でのコスト、輸入した場合のコストなどについての客観的な分析に加えて、エネルギーと原料双方の視点での石油化学への影響、将来的な世界の地政学上の変化について紹介されました。

大阪の研修・講演会では、(独)理化学研究所チームリーダー・大阪大学教授(広島大学教授)の升島 努先生に「電気自動車 i-SAVE の開発に学ぶ」と題して、塩ビ製エアバッグを使った衝撃吸収型 EV カーの開発状況や苦労話などを紹介していただきました。質疑応

答においては、塩ビシートの優れた耐候性について、先生と聴衆の間で対話型のコミュニケーションが行われました。

JPECの活動についての問い合わせは、以下にお願いいたします。
塩化ビニル環境対策協議会：info@vec.gr.jp

随想

「農ビリサイクルと私」 - 第一章：農ビリサイクルとの出会い -

株式会社黒田工業 黒田 實

昭和20年代までの日本列島の農業において、ハウス栽培はすべて油紙で行なっていた。トンネル式プラスチックフィルム（農業用ビニール：以下、農ビ）が登場すると、全国的に猛烈な勢いで普及していき、農家の間では大革命が起こったと言われるほどであった。油紙は透明性がなく太陽光線を通さない為、熟した野菜の色が日陰栽培の野菜のような色になり、ピーマンやナスなどは黄色く熟した色を呈していた。それに比べ、農ビの透明性は高く、太陽光をたくさん受けることが出来るので熟した野菜の色は自然で新鮮であった。

ある日（昭和39年11月）宮崎県庁と西都農協の方6名が訪れて来られ、「農業立県宮崎というが、特産物が何も無い。現在（当時）高知県がピーマン生産高日本一で、その後塵を宮崎県は拝しているが、高知に追いつき・追い越し宮崎県を日本一にしたい。農家から出される廃農ビを適正処理しないとピーマン生産高で日本一になれない。しかし、処理料金は農家からは取れない。無償で処理再生出来ないか……？」無茶な話であったが、年間7000トン出ればそれを再生して販売すれば工場運営は成り立つか否か？と考えると県庁の一人の方がぼつぼつと裏話を話し始めた。

「宮崎県には日向灘のきれいな海と砂浜がある。しかし、その砂浜には農家が捨てた黒ずみ劣化した農ビがたくさん打ち上げられている。農家が新しく農ビを張り替える度に土手や川沿いに使用済みの農ビを捨てる状況が続くと、社会問題化し、農ビを使えなくなる恐れがある。一夏に数回台風が南九州に通過・上陸（以前、宮崎県は台風銀座と言われるほどたくさん台風が通過した）するので、その度にあの日向灘のきれいな砂浜が汚れてしまう。更に深刻な問題は、ウミガメが産卵で浜に上がっている時に産卵をし切れずに苦しむような体位で死んでいることである。死んだウミガメを県の方で解剖してみるとウミガメの胃の中から大量の農ビが見つかった。このまま放置しておく、と深刻な社会問題にまで発展してしまうかもしれない。」と言う裏話だった。

ウミガメが太平洋の荒波で洗われた農ビをえさのクラゲと間違えて農ビの先端から食べ始め、途中で噛み切ろうとした時に噛み切れず、幅2m、長さ数十mの農ビを腹の中にすべて入れてしまい死んでいってしまうらしい。私は、その話を聞いて迷っていた気持ちが吹っ切れ、やろうと決心した。誰も手掛けた事がない仕事だけれど絶対やってみようとの時決心した。やれる、絶対やってやるとの固い気持ちになったことを昨日の事のように鮮明に覚えている。

（つづく）

次回は、「第二章：黎明期」です。

編集後記

先日大正12年に建設された古民家で食事をする機会がありました。

そこには私の幼少の頃の家そのものの風景がありました。外には井戸、窓はがたがたと音を出す、木枠にガラス。

懐かしいと思いつつ感じたのは座っていると寒いと思ったことです。窓からはすきま風が入ってきて気になって仕方ありません。

でも、子供の頃の私の家は土間で、外から風が入るのは当たり前。寒いと思った記憶がまったくありません。地球温暖化と言われていますが寒冷化も進んでいるのではないかと勝手に疑いましたが、最近のどこにいても寒くない環境にすっかり体がなまっているんだと反省しました。(リマル)

関連リンク

[メールマガジンバックナンバー](#)

[メールマガジン登録](#)

[メールマガジン解除](#)



編集責任者 事務局長 東 幸次

東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601

FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.gr.jp>

E-MAIL info@vec.gr.jp